窓際天使

愚図男

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
窓際天使

【Ｎコード】
Ｎ０２３２Ｆ

【作者名】
愚図男

【あらすじ】
高二の夏思ってしまった『俺、青春してねーなと』なんだかんだで恋することに、そん時現れた女子達達、クラスから部活からまー色々とりあえず片っ端から声かけんべ

ぷろろーぐ

ふと、夏休み目前のあるバイトも休みな暇な日曜
己の愛車(バイク)を磨きながら思った

俺、青春してねーなと

次の日その事を友達に相談すると

「ふ～ん恋でもすれば」

とダルそうに返してきた
そうか～恋か～

「……誰に？」

とても素朴な疑問だった

「ん～ん？適当」

そんなこんなで物語は始まる

一話め（前書き）

なんか色々中途半端でした
がんばろ

一話め

「ん～ん？適当」

一番後の窓際席に座りながらなにやらチャラそうな雑誌を読んでいる
このやる気を感じさせない同じクラスの一応親友？
宮山圭男（みややま・けい）１７、１８０ｃｍ黒髪のサッカー野郎
とは幼少よりの仲
うちの学校ではかなりのモテ男くんだ

「てかさ、真ちゃん」

読んでいた雑誌を机に置きこっちを見る

「いきなりどーゆう風の吹き回しよ？」

真ちゃんとは俺のあだ名である
河田真司（かわた・さなじ）
しんじとは読まない
男１７、１７５ｃｍ帰宅部
あだ名として挙げられるのは、真ちゃん、しんのすけ、まこと氏など……ふざけた名前だと思う

「それはな……」

昨日思った事を話す

「ふ～ん、で？」

微妙に興味なさげに言いやがった

「で？て言われてもな」

ハァーと溜め息をついて圭は語り始めた

「言っとくけど真ちゃんに女は紹介しねーよ」

早くも俺の青春は遠退いて行きそうだ

「は？なんでだよ、散々人にやれ女はいいだの、早く彼女作れだの、勝手に俺のメアド教えたり、してたくせに！？」

ハァーと更に溜め息をする

「確かに俺は真ちゃんにいろんな娘を紹介したよ
どの娘も真ちゃんに好意があったから
なのにオメェは」

今バイトで忙しい、
あ？中免取るから後にして、
解体屋から壊れたバイク買った修理で忙しい、
最近知らねーアドからメール来るんだけどマジ怖い

「などなどなど、挙げればキリがない」

え？そうだったのと？あれ違うのと？

「？？？」

俺がアホな顔をしていると
ハァーとまたも溜め息をし
「ぶっちゃけ、ソレが原因で結構女の子泣かせてるよ」
もはや驚きで声が出せず顔でマジ？と訴えると親友は
「うん、マジ」
更に付け足して
「ソレが元でさ真ちゃんこの学校の女子の大半に嫌われてるから」
と、いらん情報と一緒に肩をポンポンと叩いてきた

あれ？始まる前に終わりそう……

二話めっす

そうだったのか
俺って女子に嫌われてたのか……まぁ内容を聞く限りじゃ自業自得か
時は進み昼休み

あ、だからなんかクラスの女子が冷たいのか！？

「あ〝ぁ〝あ〝ヴうぅ～」

机に突っ伏し頭を抱える口からは変な奇声を放つことしかできない
……

「ま、自業自得だな」

と親友は俺の肩に手を置き教室のドアの方へと歩いて行く

「へ！？お、おい！何処へ！？」

「ん？彼女んとこだけど」

しれっと抜かしやがった

「ち、ちょい、俺が困ってんだぞ何か助言しろよ！！」

すると圭は

「超ー無理」

と、言い残し教室を後にした

「くたばりやがれ！！！」

ガスンと廊下にあった罪も無きゴミ箱にあたる

廊下にゴミが散らばる

そのまま立ち去ろうとするが

ヒソヒソ、ヒソヒソ

と何やら女子がこっちを見て何か話しているようなので

「……」

散らばったゴミを片付けることにした

『そりゃさ俺の都合でいろんな娘泣かせた？のは悪りーと思ってんよだが……』

ゴミ箱にゴミを突っ込みもとあった場所へ置く

『アイツのあの態度！！！お前が（恋でもすれば）みたいく言ったくせに！！！』

思い出すだけで腹が立つ

「ちょっと、そこのあんた！！！！」

立ち上がった俺にいきなり後ろからお声がかかった

「んだクソ！！」

機嫌が悪いのも隠さず振り向くが

『あれ？』

見えるのは道行く生徒と廊下の先

『おかしーな？』

悩みすぎて幻聴でも聞こえたか？と思い前を向き直し歩き始めた

「へ～。このあたしを無視するなんて」

タッタッタ

「いい度胸じゃない！！！！」

「ぐふぅあ！！」

背中を何かが強襲し逆エビ反りしながら数メートル飛び

ビッターン！！

廊下に足の爪先が引っ掛かりそのまま顔面から床へのキス

へ？何がおこった！？

三わ目（前書き）

いいことないかな～宝くじ当たるとか……

三わ目

うつ伏せ状態で顔面を強打し痛すぎて何がおきたのかわからず混乱する

『は？え？』

「このあたしを無視しようなんざ１００年早かったな」

ギュムリ

俺の背中に片足をのせながら腕を組む女子が一人

内心いきなりのことでコンガラガっていたがだんだんと腹が立ってきて

背中の足をどかして立ち上がり振り向くが

「あれ？？消えた？？」

先ほどの女が視界より消える

「テメー、どこ見てる！！」

股間にエライ衝撃が走る

「はがっ！！」

両手で大事な部分を抑えてその場に伏せる

「やっと話せるな！！」
声に気付き土下座状態顔を上げるとそこにいらっしゃったのは
我が校の生徒の憧れ暴君な生徒会長こと
桜野月美（さくらのつきみ）高三１８歳、女
１４０ｃｍ身長は小学生並み
ブラウン色のロングがクルクル巻かれた髪
顔付きも幼くまさに黙っていれば美人で人形のよう
何度か全校集会でステージで話すのは見ていたが
『あぁなんかいい／／／』
ポヤ～ンと急所を蹴られたことなど忘れて見つめていると
「……だからな！！責任とれよ！！ってうげ！？
テメーあたしの話聞いてたのか！！！」
「はっ！？いえ全然／／／」
しまった、だいぶ見つめすぎた
あ、ヤベ俺引かれてる！？
訝しげな顔をしてコッチを睨んでいらした
「……もう一度だけ言うぞ」
コメカミに血管が浮きヒクついている

「ゴミ箱でも校内の器物を壊したからな弁償しろ、生徒手帳出せ」
あぁ～お綺麗だ～彼女作るならこんな人にしたい
「……おい……」
ピクピクプルプルいっていた生徒会長が我慢の限界が来たらしく
「……はい／／／」
この俺の一言により
ブチッッッ！！！！
「人の話を聞けぇー！！！」
「ぎいゃやああぁ～～～ん／／／」

その後ボッコボッコにされたのは言うまでもない

よんわめ

自習
黒板にデカデカと書かれていた

「……真ちゃん昼休みなにしてたの？」

「んあ～？」

五時間目の始まり後ろの席の親友が話しかけてきた

「グフフフフ♪……今の俺にそれを聞く？
ま～どうしてもってなら話してやんな……」

痛々しく目の上やホッペを青く腫らし
至福の表情でまた妄想に入る

「じゃ、いい」

「いや聞けよ！！むしろ聞いて」

昼休みの出来事をとにかく話した

「へ～だから廊下の真ん中で正座してたんだ」

「ん？なんだ見てたのか、しかしイイよね」

もう思い出しただけで胸が高鳴る

「なにが？」

「バカか今の話しからして桜野先輩のことだろが」

圭のヤツは目をキョトンとさせて

「真ちゃんミーハー、そしてロリ、最後に今更か」

「誰がロリコンだ！！！！！」

またも深く溜め息をしてから

「俺らが一年の時からずっと騒がれてたじゃん、まさか見たことも聞いたことも無かった、なんて言わないよな？」

そんな事を聞いてきた

「さすがに知ってるし！！全校集会の時とか見てたし！！」

「じゃ、あの人に振られた奴等が何を理由に振られたか知ってる？」

「……ナニソレ？」

親友は可哀想な物を見る目で

「あのさ真ちゃんが一つのことに熱くなると周りが見えなくなるのは昔から知ってるけど

もう少しそういう話しは知っとこうよ」

「？？？」

圭はかなり呆れた顔で

「……噂とか聞く限りだと彼氏がいるだとか、許嫁がいるとかで告ったヤツは振られてるよ」

間

「とりあえず頑張って」

それだけ言うと携帯を開いて何やらカタカタとメールをし始めた

「え？マジ？彼氏いんの？許嫁ってどんなんだよ？」

絶望に口が開いたままになる

「あくまでも噂だから……てかちょっと俺の机の上で死なないでよ」

圭の机に突っ伏す形で倒れる

「なんだ～そうなのか～ハァ～マジで一瞬でときめいたのにな～」

「だから噂だって、それこそ自分で確かめれば良いじゃん？」

「そね」

圭の野郎〜他人事だと思いやがって……

「あ、そうだ放課後生徒会室に来いって言われた……生徒会室の場所わかる？」

「……」

「ああ／／／早くお会いしたい放課後はまだか〜」

圭曰く

今日ほど俺がキモく思えた日はないそうだ

五羽

放課後

俺の足取りはとっても軽かった
顔はずっと笑顔に固定され、今にも口笛とか吹きだしそうだった

ああ、これが恋……

お呼びだしくらった理由は……知らん
ただ何時もはダルい階段も今日は平地を歩いてるが如くスキップぎみ

「ルルー♪」

「きゃっ！！」

階段を上っていると前方にいた女子生徒が足を滑らせ今にも転げ落ちそうになったが

「おっと♪」

運よく俺がいたのでポスっと支えてやる

「大丈夫？」

「は、はい」

「そうか♪んじゃ気をつけてね」

「あ、ありがとうございます／／／」

助けてもらった彼女は思う

『え！？ちょっとこれってなにかいい？？』

やだ顔赤くなってないかな／／／

去っていく背中を見つめる

「チョットゆっこ早くして掃除終わらないよ！！ってココだけ濡れてるし！！ちょっと男子……」

ああ、これが恋……

生徒会室

目の前の机に座っている

「で？五分も遅刻した２－Ｃ河田真司くん」

会長こと桜野月美は顔を赤く染め

コメカミの血管と硬く握られた拳を震わせていた

「はぁー／／／桜野先輩眼鏡も似合います」

そして真司も眼鏡姿の生徒会長に心を奪われ顔を赤く染めた

「……そもそも君は何故ここに呼ばれたかわかっているかい？？」

怒れる獅子を目の前にし流石に真面目に答えることにした

「いえ、それが全然わかりません（汗）」

「ほ～う……わからないか（怒）」

間

ブチッッッッ！！！！

「もう我慢ならん殺す！！」

ガタッッ！！

椅子から勢い良く立ち上がり机を乗り越え俺の前まで来るが

委員Ａ
「か、会長！！」
委員Ａが会長の腹を後ろから腕で押さえつけ
書記
「お、抑えてください！！」
書記は会長の足にしがみつき
参謀
「ほ～ら、みっきの好きなイチゴミルクだよ～」
そして参謀は餌付けをする

生徒会委員のファインプレーにより見事火災は沈静化した

「じゃ、最後だ君が蹴って破壊したゴミ箱を弁償しろ」
元の席に戻り紙パックのイチゴミルクをチュルチュルと飲みながら
俺が八つ当たりをかましたゴミ箱を指差す
プラスチック製のゴミ箱の横にはほんの気持ち程度の穴があった
「……へ？なんで？あんな穴ガムテープとかでふさいで……」
言い出そうとして言葉を飲む

プルプル、ピクピク

生徒会委員全員が俺に目で訴えてきた

『やめて！！これ以上！！』

『もう止めらない！！』

『俺達に被害が出る！！』『ゴメンねイチゴミルクはもう無いの』

「つ、つつしんで弁償させていただきます……」

フゥーーと安堵する一同

この流れは不味いと思い空気を読む

「……君には反省の色が全く見えないな、参謀！！」

ギュッ

飲み終えたパックを潰し

「あいよ会長！！」

会長の隣の席に座る参謀と言われた女子生徒は会長の前にノートを出す

出されたノートを見て生徒会長と参謀は

ニヤリ

不気味な笑顔を浮かべたが

「河田くん……」

「真司とお呼びください／／／」

手を前で組んでくねくねする

「う！？……さ、真司くん」

会長は初めて見る生物に悪寒を感じているのだろう
顔が恐怖していた

「ああ！！いい！！もっっっっと！！」

真司は身悶えをして
顔は更に赤く染まりくねくねは止まらない

「や、やめろぉーー！！！！キモすぎる！！」

生徒会長、桜野月美は後に後悔することになる
この男と出会ったことを……

6わな

キモイとの事で理不尽にもボッコボッコにされやっと落ち着きを取り戻す

「へ？？どーいうことですか？」

会長の言い放った一言に驚愕する

「貴様の言動や行動は目に余る校則違反も多々ある、普通自動二輪などいい例だ」

ニヤリ

不気味に笑い

「これ等のことを黙認してやる……かわりに生徒会に入れ、なにちょいと役職が足りなくてな」

「はあ？」

ん？俺が生徒会に！？

マジちょっとそれはダル……くもないか

え！？むしろ最高じゃね！！

目の前に座る人を前にして胸が高鳴る

「はい！！はい！！やります！！」

手を高らかに上げて返事を返す

「お??そうかそうか、じゃここにサインしろ」

サラサラサラ〜

内容も読みもせずサインする

「……汚い字だな、まあいい

ようこそ、我が生徒会へ」

「はい!!はい!!いらっしゃいました!!

ところで僕は何をすればいいんですか?」

目をキラキラさせて

生徒会長に問う

「きみの役職はこれだ……」

ダン広げられた例のノートの一部を指差す

『役職名』

{雑用委員（犬）}

仕事内容

生徒会の雑用から学校内の雑務に尽くす

生徒会委員の命令は絶対、まさに犬となるのだ

「な、なんずこれ……」

ノートを手に取りワナワナと身体全体が震え血の気が引いていく

ガラッ

「じゃ、そういう事だ宜しく」

いつの間にか教室にいた数名の委員は帰り支度を済ませぞろぞろと教室を後にしていく

意中のあの方も身支度済ませ教室を後にするところであった

「あっそうだ、手始めに生徒会室の掃除頼む、じゃーな犬」

バン

「え？えぇ？」

ドアが閉められそこをひたすら見つめた

「みっき良かったの？チョット可哀想じゃね？」

廊下を歩く会長と参謀

「フフ、ゆきっぺは優しいね、だけど
あのヤローはしばらく痛め付けないと気が済まねー！！ちゃんと契約書もあるからな！！泣くまでやってやる」

イジメを率先して行う会長にゆっきと呼ばれる参謀は

「そうだね！！こきつかってやるべ！！
あ今日ケーキ食べてこー」

「のった」

ワイワイきゃぴきゃぴともはやどうでもよくなり帰っていく

「これ、どーしろと？」

改めて見るがこの教室内は並べられた長テーブルの上はグチャグチャに
収納棚に入りきらない書類やらファイルなどは整理されずにそのまま入れられ床やらにも置かれた

「……いいのかよ重要なプリントとかもあんだろ」

床にも埃やらゴミが置きっぱに

「あークソ！！やってやろうじゃないの！！」

真司は半ヤケクソで掃除に取りかかった

その後生徒会室の掃除は見回りの用務員さんが来るまで続いたらしい

ナナ話目（前書き）

最近なかなか寝ることができないです。

ナナ話目

光野原市

私立
須都呂芽乃符学園（ストロガノフ）
通称スト学

全校生徒３００人前後の　三階校舎三棟
黒い学ラン、白いセーラーのごくごく普通の進学校
懐にリーズナブルな学園
オプションとしてブルマがもれなく付いてくるが着用率は０％

そんな学園の朝の校門にて

「おはようございまーす」

サッサッと箒をかける生徒が一人
腕には生徒会の腕章を安全ピンで止めて爽やかな笑顔で挨拶する

「おはようございまーす」

「……真ちゃんなにしてんの？」

「おう圭おはよう、てか早いな？部活か？」

ＡＭ６：３０

箒をはく手を休め親友に挨拶をかます

「ぶ、部活だけど……マジどしたの？」

驚きを通り越し驚愕した顔をする親友へ

「見れこれ♪」

腕に光る腕章を指差す

「……え？」

「あ、おはようございまーす、じゃ悪いな俺は仕事があるから」

親友に別れをつげ今度は花壇のほうへ行き花どもに水を差し上げる

シャーーー

「たーんとお食べ～？」

シャワーモードに切り替えて水をまきまき

「お？こっちは園芸部の花壇かついでについでに♪」

シャーーー

水撒きを終わらせるとまたも校門に行き

門を通る生徒、生徒、先生方、学校の前を通る一般市民にあいさつをする

「おはようございまーす」

「ん？あれ？犬くんなにししてんの？」

女子生徒がこちらへと歩みより聞いてきた

「あ、おはようございます参謀さん」

「おはよう、いや参謀て、雪奈つー名前がありますよ」

一文字雪奈（いちもんじゆきな）１８歳三年女子、１６８ｃｍ月美とは親友、みっきとゆきっぺの仲

薄い赤色の髪はショートでボーイッシュな感じ

砕けた性格なのですぐに友達ができる

かわいいのだがその性格が災いして異性に恋愛対象として見られない事が多々、最近の悩みらしい

「一文字さんって言うんですかこれからよろしくお願いします」

「よろしく～♪犬くんはえ～とたしか？」

「あ、犬でいすっよ」

などなど話していると

「ほ～う犬の分際でなかなかいい心がけだな」
ムスっとして現れたのは身長だけなら小学校の我らが会長
「あ／／／おはようございます会長♪」
『ああこのためだけに朝から挨拶をしまくっていた、やった甲斐がある（涙）』
「ん？ああおはよう」
少し呆気に取られた感じで挨拶を返してもらった
「あぁぁぁ、メッチャいい／／／／最高ぉ―！！」
イヤッホーーと叫んで一人盛り上がっている傍ら
「ゆきっぺ、アイツは大丈夫なのか？」
「みっき、あれはイカれてるぜほっとこう」
などなど大変失礼なことを言っていた
「おい犬！！」
会長はなんのためらいなしに俺を犬呼ばわりした
「……」
「おいなにシカトしてる？？」

「……名前で」

「……犬」

「……」

間

眉間にはシワをよせコメカミからは血管を浮かばせながら

「くっ！！……さ、さ真司」

「あっ！あっ！あぁっあ／／／」

ハァハァと興奮のし過ぎで鼻からは血がたらたらと

「ひっ！！き、キモすぎだぁーー！！！」

会長様のようしゃないキックの嵐

「うぐはぁぁーーーん／／／」

そんなやり取りを校門の影から見つめる生徒が一人

「真司さんか／／／生徒会なんだ～」

「げ！？ゆっこあんたなにしてんの！？メッチャ怪しいよ！！」

はちわめ（前書き）

申し訳ないです
大変更新が遅れました。
これからも頑張ります！！

はちわめ

桜野月美

ＡＭ７：３０
今日も暑くなるんだなと思いバスを降りた
バス停と学校は目と鼻の先だ
太陽をキッと睨むが温度は下がらずサンサンと輝くばかりだ
太陽を睨むのを諦め校門の方へと足を進める
「おはようございまーす」
と校門の方からやたらと元気のいい声が聞こえてきた
『ん？生徒会での挨拶運動は先週で終わったはずだぞ？』
そう思い校門の前に来る
何やら校門の影に隠れて何かしている怪しいヤツがいたがほうておこう
校門を入るとそこにいたのは
『げ！？犬……とゆきっぺ？』
妙な取り合わせに驚き近づく

「ほ～う犬の分際でなかなかいい心がけだな」
犬はあたしに気付いたらしく笑いながら
「ああ／／／会長おはようございます」
なかなか爽やかな笑顔をくれやがる
と少し好感を得たのはつかの間だった
何やら調子に乗ったので

前回の続きから
朝からボッコボッコにのすことでこの犬はやっと落ち着きを取り戻した
只今校門の前で正座をさせている
「フゥー、やっと落ち着いたかこの犬めが」
正座する犬を目の前に腕を組み仁王立ちした
知らず知らず大きな溜め息がでる
「生徒会員として挨拶運動をするの非常にいいことだ」
少し誉めたやった
「てか貴様、昨日言っておいた生徒会室の掃除はどうした？」
まずゆきっぺとアイコンタクトをして

不敵に笑う

『さ～て、終わっていなかったらどうしてやろう』

と1日で終わるはずもない生徒会室の掃除をさせたのだ終わってる

わけもないのでその後この犬どうするか楽しみだ

「掃除っすか！？やりました超ーやりました！！てか終わりました」

目をキラキラ輝かせ今にも星が飛んで来そうだ

「は？？何言ってやがる」

あの教室内の掃除が一朝一夕で終わるはずがない

あたしらだって幾度となく掃除を断念したことか

「犬くん犬くんさすがに嘘はよくねーよ」

ゆきっぺもそれは無いだろと言う

「いやいやちゃ～んとやりましたよ」

なんて返答して来るものだから

「いや嘘だな、あたしらにできない事が犬の貴様にできてたまるか」

「うんうん」

ゆきっぺも激しく同意のようだ

「いやいやマジやりましたよ」

あーだこーだ
やりました、できる訳ない
嘘つきめ、嘘じゃないっす

ただの確認のために聞いたことがどんどんエスカレートしてきた

「だぁぁぁ！！ウッゼー」

「はうん／／／」

綺麗にきまった会長のアッパーにより俺の意識は完全に削がれた

「みっき、さすがにやり過ぎ」

「うっ……」

9話目（前書き）

ヤルゾ～やったるわ！！！！

9話目

いつもと変わらない朝を迎える予定だった
でも今日はなんか違う！！
いつもより少し早い時間に家を出た

そう朝から気合いが入っている私

菅木津　柚希（かんきつ・ゆずき）
１６０ｃｍ・女・１６歳二年生

長い黒髪ストレートの女子
美人で成績優秀・スポーツ万能
才色兼備だがドジで妄想癖がある
趣味は読書とゲーム
地味な感じで委員長タイプ
実家が有名な空手道場なので彼女自身も有段者
門下生曰く彼女の蹴りは肌を斬るそうだ

キレるとメチャメチャ怖いそれが災いして中々彼氏が出来ないとか

［［菅木津　柚希］］

昨日からずっと私をときめかせて止まないのはあの階段での出来事
からだ

サラッと親切をしてサッと去って行くあの方笑顔が忘れられない↑
そう見えた
今日会ったら昨日のお礼をして名前を聞こうそしてお知り合いになってゆくゆくは……
ブフーー!!
し、しまった興奮し過ぎて鼻血が……
妄想と鼻血を繰り返しながらも学校の校門まで着いた
「おはようございます」
と、そこで挨拶をしていたのは紛れもなく昨日のあの方↑真司が爽やかな笑顔と共に挨拶を振り撒いている
『よ、よし!!朝から運が良い!!こんな所で出会えるなんて……あれ運命!?
よっしゃ!!然り気無く挨拶をして昨日のお礼して、ついでに自己紹介して……よし完璧!!行け行くのよ柚希!!』
そして運命の一歩を踏み出し校門から学内へ入ろうとした
「ん?あれ?犬くんなにしてるの?」
と先に話しかける女子に戦意を削がれ何故か校門の端に隠れてしまった

『ちょっと何なのよ！！人が今行こうとしてる時に！！』

そして何やらその女子と親しげに話している

『誰だろ？彼女さんかな？』

そう思うとブルーになって行く

そこへ見覚えのある背丈と後ろ姿が入った

『あ、会長さんだ今日も小さいな』

等と思っていると

彼は笑顔を更に明るくし会長さんに話しかける

「……名前で」

「……」

「く！！……さ、さ真司」

『へぇ～、真司くんて言うんだ／／／』

その後彼はなぜかボコられていた

そこで気が付いた彼の腕に着いている腕章に

［生徒会］

「へ～真司くん生徒会なんだ／／／」

名前は真司で生徒会委員

思わぬ収穫をした

「げ！？ゆっこあんた何してんの？メッチャ怪しいよ」

何か汚物を見るような目で私に呼び掛けたのは
ちなみにゆっことは私のことらしい

「あ、麻里おはよう」

大玉　麻里（おおだま・まり）
１７０ｃｍ１６歳・女・高２年

柚希と同じクラスの親友
まさに今をトキメク花の女子高生、ナイスボデーだ、胸がデカイ
中々ノリのわかる娘
彼氏がいるとかいないとか

「あんた朝から変質者まがいのことしてんじゃないわよ」

グイと私の腕を持ち上げ立たせようとするが

「ち、チョッと今は不味いんだって……」

と麻里も同じ所にしゃがませる

「な、なんなのさ！？」

クイクイと指を指してあっちあっちと強調する

「ん？なに？……ありゃ真司と……会長さん？」

「うん、素敵だよね」

丁度真司くはなぜか地面にうつ伏せになって倒れていた……

あれ？今もの凄い名前を聞いた気が……

「麻里、真司くんの事知ってるの！？」

「だぁ～うるせっ！！」

予想以上に麻里が近くにいたことに気付かず声のボリュームを考えていなかった

「あ！！……ごめん／／／／」

道行く人や校門をくぐろうとする学生達からの視線をバッチリ引き付けてしまった

恥ずかしい～／／／／

「あ、それでさ麻里彼の事……」

「知ってるよヨ～ク、幼なじみだし」

幼なじみですと～！？

「私の家の前にある家わかるでしょ？あれアイツの家」

思わぬ情報をまたもやＧＥＴした

9話目（後書き）

スンマセン
今更なんですがこの小説に関する
ご意見・感想・ございましたら容赦なくださいい
作品をより良くするためご伝授の方お願い致します。

十話目（前書き）

今後の作品の参考にして行きたいので
容赦ない感想などいただけないでしょうか
宜しくお願いします。

十話目

［［菅木津柚希］］

なんと同じ中学、高校を共に過ごした親友は憧れの彼と幼なじみという事実が発覚した

「ガチで！！！！」

「！！！！」

普段あまり言わないような言語を発したためか麻里は体をビクッとさせていた

ヤバい！！今日1日にしてイロイロな幸運が舞い込んで来てる……私が思った以上に彼とお知り会いになれる確率はぐぐぐ～んと上がった

「あ、あのね麻里お願いがあるの……」

「はぁ……紹介しろと？」

コクコクと首を動かして頷く

「う～ん」

何やら麻里は頭に手を当て考えてる

学校指定の半袖ワイシャツからは（季節の設定は夏なので）彼女の

特徴でもあるビッグメロンが２つワイシャツのボタンは結構パツパツだ

『何食べたらこんなに育つのだろう』

自分の胸に手を当てて己のサイズを再確認

『私もあの位立派な胸があればな……』

気付けば片手を彼女のメロンの片方に手を当てていた

「……何してんの？」

訝しげな目で私を見るが

「ねぇ何食べたらこんなに育つの？」

「いやいや、そんな話しじゃなかったろ！？そして揉むな！！」

あーあ羨ましいそう思いながらメロンから手を離す

羨む気持ちを隠しもせずむしろ嫉妬をする

「なんで私の胸は麻里より小さいの！！」

「知らねーよ！？」

言ってから悲しくなった私は胸は諦めることにした

そう言えば私はこんなことをしている場合ではなかったここにいる

麻里に頼みこみ何とか彼とお知り合いに……て

「あれ？いない？」

先ほどまで真司がいた場所には誰もおらず

「さっき、会長さんともう一人の人が連れてったよ」

その時遅刻を知らせるチャイムが鳴り響いた

２－Ｄ教室

「麻里お願い！！」

今は２時限目も終わり短い休み時間のこと

私は親友に頼みこんでいた引っ込み思案の私にしてみればかなり大胆なことだったと思う

私の熱意が伝わったかどうかは知らないがかなり悩んだ末についに麻里は折れた

「フウー、わかったよ」

「ありがとう！！」

感涙のあまりガバッと親友に抱きついた

「昼休みにでも会わせるから……てどさくさに紛れて胸もむな！！」

そして昼休み
２－Ａ教室前
颯爽と弁当をかっ食らっうこと5分
まだ残ってるとワーギャー騒ぐ麻里を急かすことでやっとたどり着いた

「いたいた、圭くーん」

何やら教室の中にいる誰かを呼んでいる

「ん？何したの？」

出てきたのは背が高く確かサッカー部のエースとか何とかぶっちゃけ麻里の彼氏だ

「あ、この娘は柚希ねまー知ってると思うけど」

紹介された私達はあ、どーもと会釈する
しかし忘れていないだろうか麻里よ

「ち、ちょい麻里いい？」

「ん何？」

麻里の彼氏に背を向けて女だけの秘密の密談をする

「ちょいと麻里さんや改めて君の彼氏を紹介されても困るんだけど？」

そう今は麻里の彼氏を紹介されても嬉しくない酷いな私

「あ～うん、違うよ真司と仲いいのよ、てか圭くんも私も真司の幼馴染みなのさ」

成るほどそうだったのか！！ゴメンね麻里

そう言って改めて向き直ると麻里は要件を言い始めた

「あのね圭くん実を言うとね柚希が真司を紹介して欲しいんだって、だから私と圭くんで真司と柚希を応援しようよ

どーせ真司の事だし彼女なんかいないでしょ？」

事の顛末を話した後

彼氏さんはゲッといった顔で非常に困った顔をした

「いや、う～んどうだろう？チョッと微妙だな」

返事は微妙との事で返された

「えぇぇ！？なんで？」

と、その真相を確かめるべく麻里は彼氏を問いただしていた

しかしハッキリした返事はなかなか帰って来なかった

「ああ」だの

「う～」だの

「だけどな～」だのと何故ダメなのかと言うハッキリした言葉は帰って来ない

『さっきからゴチャゴチャと』

と私のボルテージは段々と上がって行った

『後少しでお知り合いになれる所なのに何なんだ麻里の彼氏は人の

恋路を邪魔してるんですかね？あ～イライラするなぁ～』

気が付くと私の足はヒュッと音もなく振りだされ、圭の顎スレスレの場所にあった

「さっきから聞いていればウダウダと……私に真司さんを紹介するのしないのどっち？」

彼の顔はかなりひきつり恐怖を覚えていた

「し、します！！」

それを聞いて今自分がした事に気付き一気に恥ずかしさが込み上げて来た

直ぐ様足を下ろして謝る

「ね、ねぇ彼女は何なの？」

圭は若干声を震わせて麻里に小声で聞いた

「う～ん出ちゃったか柚希の癖」

「へ、へぇ～」

圭は思うのであった

『真ちゃん……俺は悪くないよ』

と

十話目（後書き）

雨月さんからメッセージを頂き話の文字数を多くしてみました。
雨月さんありがとうございました。

11わ

［［河田真司］］

目が覚めるとそこには一面のお花畑があった

「おい、真司」

後ろを向くまでもないお声だけであのお方だとわかる

「会長」

二人はいつの間にか磁石のように向かいあい近づき互いに手を取り

「あははは」

「うふふふ」

的な状態に

クルクルと互いに手を繋いだまま回り始める

［リアル］

２－Ａ教室

一時限目

数学

「おい、河田起き……う！！」

数学教師が起こそうと試みるが

「……あはははは……うふふふふ……」

白目を向きながら何かを呟く真司に例えようの無い悪寒を覚える

結果：放置

［［再び河田真司］］

お花畑でひたすら回るのに疲れた俺と会長はその場にゴロンと仰向けになった

「なあ真司」

会長は上半身を起こして座る

「何ですか会長」

「あ、あたしの事す、好きか／／／」

ふっ、そんな顔を赤くしなくても言う事はきまってます

「超大好きです」

「／／／」

無言で更に顔を真っ赤に染め上げる会長

俺も体を起こし無言の彼女の手を握り手を使って顔をクイッと上げ

させる
すると彼女は目を閉じ薄く染まった唇を
「ん／／／」
と、する
「か、会長……」
俺もそんな彼女に答えるべく
「んんんん／／／」

［リアル］
2時限目
英語
「Ｍｒ．河田ずっと寝てるんですって？とっとＷａｋｅ ｕｐなさ……げっ！！！！」
英語の担任が真司を起こそうとするが
至福の表情で軽く尖らせた唇を
「……チュチュチュチュチュ……」
とさせていた
英語の担任はコレを見て全身の鳥肌が立った
結果：放置＋その後は自習

［［またまた河田真司］］

「コレ作ってみた／／／」

恥ずかしげに彼女が取り出したのはお弁当だった

「コレを俺に……」

コクンと頷くとおかずの玉子焼きを箸で摘まむと俺の口のそばまでもってくると

「ほら、あ、あ～ん／／／」

『ま、まじでか！？イヨッシャー！！』

「あ～ん／／／」

その玉子焼きを15回以上しっかり噛み味を噛みしめる

「うまいか／／／？」

モチロン言う答えは一つだけ

［リアル］

三時限目

現代社会

「え～つまり男女平等を訴えた影では女性は……」

「メッチャうまいっす！！！」

そこで現社の担任は教科書を読むのを止め
クラスの女子は顔を赤らめる物から、キモイ、最低等の罵声が浴びせられた

四時限目
体育

「おーい河田ーいるか？」

「教室で寝てま～す」

グラウンドで出席が取られていた

「そうか～教室戻ったら河田に言っとけ～通信簿体育1な～」

［［……真司］］

「うおりゃ！！」

「ごふっ！！」

弁当を食べさせて頂いた後、何故か会長のアッパーが顎に決まった

ところで俺は夢から覚めてしまった……

現在昼休み

「オォォォ！！」

『勿体ない、勿体なさすぎる！！！！何故目を覚ます俺のアホ！！』

とりあえず

現実へと戻った俺は自らのアホさ加減に発狂した

しかし止める者はいなかった……

『シカトかよ……』

少し悲しくなったのでそのままブータレテ弁当を食う事にした

『ああ、でも良い夢だった……会長の事だから絶っっ対にあんな反応してくれるよ／／／／今からチョー楽しみだ♪』

自分の未来に夢を膨らませモシャモシャと弁当にガッツク

「あ…あの」

『はっ！！そういやあれは初キッスでは！？実際弁当の味したし（↑アホ）クス、クスクス♪』

「あの……」

『夢の中とはいえ名前で呼んでくれてたし俺も月美さん……とか言ったりしてみっかな／／／／あ～なんか唇にも耳にも会長の余韻が

……』

「あの……真司さん」

ブチッ

「今その名を呼ぶな！！！！会長の余韻が消えるだろ！！！！」

ガバッと声のした方を見ると何か知らん顔の女子が？を浮かべながら困惑した顔で立っていた

「誰？」

と疑問をストレートにぶつけるとスパーンと頭を叩かれた

「真司！！ゆっこになにしてんだよ！！」

「げっ、麻里かよ……てか余韻が消える！？」

そいつは最近めっきりと片言も話さなくなった幼馴染みの一人、麻里だった

圭と付き合っているのは知ってたが

「なんだよ？さっきから余韻、余韻って、うわ！！キモ！！どうせ変態が見るような夢見て悶えてたんだろ？童貞野郎がマジ引く！！」

まだ男言葉が抜けてない……カッチン～と来たね

「はぁ！？ウッゼーよ！！俺の夢を甘くみんな、あの方の素敵で可憐でドキドキしちゃうとこを覗き見る

そんな素敵な夢だ！！！！テメーみたいなヤツが見る夢はせいぜい巨大パフェとか食うだけの夢だうろがよ、あぁ！！格が違うんだよ格が平平凡凡め低いんだよ！！」

まぁ昔からなのだが俺と麻里は犬猿の仲らしく会えばかなら喧嘩するスキルを持ち合わせていた

「ちょい麻里！！喧嘩してる場合じゃないでしょうが！！」

昔からだが圭は俺と麻里の喧嘩の仲裁役だ

「……あ、ゴメンねゆっこ！！」

そう言って、ゆっこと言うらしい娘に麻里は謝っていた

俺の会長の余韻達を消し去っておいてどーかと思うが

「チッ、気分悪りぃ……」

舌打ちをした後ここに居るのがマジで嫌になったのでそそくさと教室を後にしようとした

「真ちゃん、どこ行くんだ？」

圭はいつもよりドスの効いた声で俺を止める

「……別に」

それだけ言って教室を後にした

気分が最悪なので風にでも当たろうと屋上にやってきた、生徒に開放している場所ではないので鍵はかかっていた
まぁ壊れていれば意味ねーけど、鍵かける位ならドア潰してしまえばいいのにな……

『はぁぁぁ、またヤっちゃったよ』

ドアから入ってすぐの所の壁に寄りかかり
おもむろにポケットに手を入れて包み紙を取って箱を開ける……

「フゥゥー、クチャクチャ」

ライムミントガム
タバコじゃねーぞ

とりあえず先ほどの事を反省しようと思う

ポトッ……

上から火の着いたタバコが降って来た

「……」

「……」

入口の上にある場所、そこにいるヤツと目が合った明らかに相手はゲッて顔をした

「……」

落ちたタバコを見つめそれを手に取ると

「スゥーーーハァーーー……不味」

そして火を消し見えない所へヒョイッとその後スタタタタと入口上部分に速攻移動

「……」

俺様の余りの素早さに目が点のまま逃げる瞬間を逃してしまったらしい

「おいテメー、一年か」

ビクッと体を震わせたのは

女子はスカーフの色で学年が分かるオレンジは一年、ブルーが二年、レッドが三年だ

んで目の前の女子はオレンジで一年だ

「未成年の喫煙は色々あってよろしくない」

「へ？あ？知ってます……」

は？何言ってるのコイツ的な目で見られた

「テメー、一年だろ？」

「は、はい」

「ゴッメ～ン、先輩の愚痴聞いてぇ～」

ドカッと一年女子の横に座り

「は？え？ちょっと……」

最初に話したのは、ん～まぁ確か幼馴染みの事だった気がする

とりあえず愚痴りまくった

「でな、その会長がなヤバイ、ラブリーなんだわ／／／／」

そう確か最初は何か愚痴った気がするが何だかんだで生徒会長、桜野月美の良い所談義に変わってしまった

もはや一年女子は勘弁してくれと言わんばかりだった

「あぁ～放課後よ、まだか！！」

と訴えて携帯をみるとおっと、もう放課後やん！！！！

「いよっしゃー！！生徒会室行くぞー！！」
気合いを入れて立ち上がった
「や、やっと解放される……」
一年女子は最早疲労困憊でフラフラしていた
「そうだった……ん」
片手を後輩か？に差し出す
「？？？」
何この手？見たいな表情で俺に何やら訴えるが
「タバコだよ没収だ、俺一応生徒会だからな」
渋々といった感じで俺に手渡す
「中々素直でよろしい」
ペットを撫でる要領で頭を撫でてやった
すると何やら下を向いて黙りこんだ
「そうだ、後輩？よ昼休みとかはここにいるのか？」
コクリと微かに首を縦に振る
「ふーん、俺もここに来ようかな」

下を向いていた顔を上に上げては?何言ってんのみたいな表情だ

「先輩の愚痴聞いてくれた礼だ今度は俺が聞く、それに生徒どもの非行防止にも役に立つ
おっと、そろそろ行かないと」

ヒヨイと下に飛び降りた

「じゃーな、気をつけて帰れよ～……黒か……顔に似合わずエロいの着けてるな」

「！！！！」

それだけ言って屋上を後にする
後輩の顔は夕日以上に紅く染まっていた
何だかんだ言ったが本当は教室に居ると色々と五月蝿くなりそうだったから逃げ道にしただけなんだけどな

「さ～て生徒会室行くか～会長／／／ウフフフ」

１１わ（後書き）

一生ジャグラーやっていたいなと最近めちゃめちゃ思います。

何故あんな単純な構造なのにのめり込むのだろうか……ガシャンの音と共にＧｏＧｏ．Ｃｈａｎｃｅのランプが光ると背筋がゾクッとしてしまいます

あれは、不味い実に

最近の休日は朝からパチ屋に直行して台をザ～と見た後マンガを読んでいい感じになった頃合いを見計らい台に座ります

後は永遠と台を変えたりしながら１日を終えます

まぁその位にのめり込んでしまった

最初は酷かった、ずっと負け続けてました

あの時に辞めれればな～と思います涙

小説関係なくなりました

パチンコ・パチスロやっている方々興味を抱いている方々本当に程々にしましょう

色々スイマセンでした

12（前書き）

遅くなりました

12

桜野月美

朝方のことだがあの五月蝿い犬の顎に一発アッパーを食らわせ失神させたた後
流石に罪悪感に襲われたあたしとゆきっぺはそれぞれ片側ずつ足をもち引きずって校舎内に引っ張っていくと玄関先で

「あれ？真ちゃん？」

朝練を終えたらしき背の高い男が下駄箱で犬の名前を探している私達と寝ている犬に近づいてきた

「お♪君はこいつの学友かい？」
ラッキー犬を運ばなくてすむ
てかコイツ背高いなとチョッと羨ましく思う

「はいそうですけど？」

「そうか、ならこの犬を頼む朝から校門付近で寝ていたのでな……」

チラッと犬の顔を見ると目が白目を向いていた

「じゃそういう訳だよろしく」

「そういう訳だよイケメンくん」

「は、はぁー？」

それだけ言ってその場を後にする
意味わからず押し付けられたノッポ、あたしはそう名付けた
は犬を迷惑そうにしながら靴を脱がしていた

「しかし、ゆきっぺイケメンくんはないだろ？」

廊下を教室にむけて歩いているちょっと疑問に思ったので言ってみた

「そう？カッコいいと思うよ結構女子にも人気あるし」

意外な答えが帰って来たゆきっぺ結構ミーハーなのか？

「いやいや、ゆきっぺてばあれは見かけだけの野郎だよ」

多分そうだ、あんなチャラチャラしたヤツどこがいいのやら髪染めてるし……注意するの忘れた
しかしこう言われると若干親友のセンスが疑われる

「ゆきっぺ因みに他にカッコいいと思うヤツっている？」

そう言うと
ん～と少し考えた後とんでもないぶっ飛んだ答えが帰って来た

「そうだな犬くんかな？」

「は？」

あたしの耳を疑う返答が聞こえた

「いやいやいや無い断じてない！！」

そこは完全否定する

「そうかな？顔は悪くないし結構可愛いと思うよ」

またも気色悪い答えが来た

「うげ～ゆきっぺあんなのが趣味なのか」

「趣味って酷いなみっき、私は一般論を言ってるだけだよほら中々一所懸命な所とかいいと思うのに」

親友の目を見つめるとあ、この目はマジだ

本当にそうか？絶対にウザイだけだって

あ、犬の野郎ゴミ箱の弁償代持って来たか？

「ん～わからん、ダメだウザイヤツにしか見えない」

ゆきっぺはハァーと溜め息をつくと半ば諦めた感じで

「だから彼氏とか出来ないんだぞ」

残念そうにそう言った、ゆきっぺには悪いがそんなのいらないんだよ

それに今のところ全然興味を持てない

まぁ多分あたし自身が恋愛事に諦めを抱いているからだろう

何だかんだ言っている内に教室に着いた

［色々あって放課後］

ゆきっぺは遅くなるとの事で先に生徒会室に足を運ぶ

『今日の議題はどうするかな？あ、来年の部費の割り振り決めて無かったなあー面倒臭い』

と今後の我等の方針について悩んでいると生徒会室の入口に何やら人が集まっていた

「なんだお前達入らないのか？」

集まっていたのは役員達で何故にここにいる？しかも、あたしの背丈では見えん……

「あ、会長お疲れ様です」

「会長、ちょっと見てくださいよ！！」

入口に集まって役員達はバッと避けて教室内の状態を露にする

「こ、これは！？」

開いた口が塞がらないとはこの事だ

「ありゃ？皆してなに固まってんの？」

遅れて登場したゆきっぺが側に来てやっぱり同じく固まる

しかしこのままでは話が先に進まないので教室に入る事に

あれほど悲惨だった教室内は見事に綺麗になりすぎていた

「……」

「……」

「……」

役員達全員言葉を無くし取り敢えず各々の席に着く事にした
しかしもはや諦めて誰も掃除や片付けをしなくなっていたというのに

『掃除すか？やりました！！てか終わりました』

「やれやれ、本当だったとは……まぁいい早速だが話を始めよう早速だが去年と一昨年の部費の資料を取ってくれ」

「……」

「おい、書記長どうした？」

書記長はなぜか教室の棚を行ったり来たりしていた

「スイマセン、資料が見つからないっす！！」
はぁ？何を寝ぼけた事を

「何を言っている？昨日、机に出しておいただろ……」

「遅くなりやした～」

その時間抜けた声と共に入って来たのは犬だった

「犬くん遅いぞ」

ゆきっぺが一喝入れる

「も、申し訳ないっす会長遅くなってすみません！！」

そう言った後私の席に近づいて来て空いていた席に
つまり席の作りとして黒板に背を向けて座っているのがこの私だが
それを中心にするように残りの席は向かい合って座っている
左側の窓際にゆきっぺの席、その正面右側入口側の席に座った

「あ、あのそこ俺の席……」

書記長の席に犬は座った

「何言ってんの？今からここは俺の物だ、なんたって会長に一番近
い席ここだし
それに空いていた、だからここに座っても良いのだ反対側には参謀
さんがいるしここがＭｙベスポジなんだ！！」

「え！？じゃぁ俺はどこに……」

すると犬は

「ん？じゃーそこ」

指を指した先にはボロい折り畳み式のちゃぶ台と綿のはみ出たカエ
ルの子供椅子

書記長は口に出来ない訴えを目で私に訴えて来た弱いな書記長

「おい犬、貴様の席はそこではない貴様には特別に席を用意している」

マジっすか！！と驚いた後何故か私の席の近くに来た

「まさか会長から積極的にとは……照れますな／／／」

「おい……何のつもりだ？」

この犬は私の席の隣すぐ近くつまりの私の椅子に割り込んで来た

「え？いや俺にとって特別な席ってあれ？」

ブチっ

切れてはいけない血管が切れたかもしれない

「死にさらせ！！犬めが！！」

果てしなくおもっくそその醜い顔を蹴った

「ゴハッ！！いいぃぃ／／／／」

「テメーの席はそこだ！！」

指を指してやったのは教室の一番後ろの端

先程まさに犬が書記長に進めた席だ

「貴様の席はあそこ」

「まじすか？」

ヤツの驚いた顔はかなり傑作だった

吹き出すのをこらえてゆきっぺを見るとやはり笑いをこらえていた

「それでは話を進めよう、書記長資料は見つかったか？」

書記長は資料を探していたがお手上げらしく首を横に振った

「はい」

ん～何とかならんものか……

「はい、はい」

仕方ない今日は部費を決めるのは止めて他の議題で話を……

「はい！！」

話を……

「はいはいはいはい！！」

……

あからさまにシカトしているのを気にせず挙手をするあ～ウザイ

「ちっ！！貴様は小学生か？一体なんだ？」

コレでしょうもない話をしたらフルボッコだ

「部費の資料すよね？それでしたらコチラのファイルに年度別にキッチリまとめておきました」

サッと渡されたファイルには年度別に整理されたプリント

確か昨日までは野ざらしにしていたプリントだ

「色々ゴッチャになってたので他の資料も年度別に整理しときやした、その資料はそっちの棚にそれはそこに、あれはコッチに……」

あれ？何故コイツが資料の位置を？

「ま、まてまて一度に言われたらわからなくなる

そもそも何で貴様が資料の位置に詳しいのだ？」

すると犬は自信満々に

「掃除したの俺すから」

そうだった確かに昨日掃除を任せたのは私だがここまでするとは

「犬くんスゲーじゃん見直したぞ！！」

ゆきっぺは犬にグッと親指を立てた

「いや～照れる／／／」

これには他の委員達も感服したのか拍手などしていた
するとゆきっぺは私の耳元で
「いい拾い物したね♪」
と囁いた
「ん、確かに」
しかしこの時はオマケが着いてきて得したな～位にしか思っていなかったが後に私は後悔することになるこの犬を拾った、拾ってしまったことに……

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0232f/

窓際天使

2010年10月16日20時14分発行